

香川大学図書館企画展示

うみとほんのあいだ

香川県立図書館 1階閲覧室 展示コーナー

2026年9月1日（火）—— 9月27日（日） 休館日を除く

海をめぐる

アートとサイエンス

主催 香川大学図書館
共催 香川県立図書館
讃岐ジオパーク構想推進準備委員会
助成 地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）
出展 中國正寿 | 香川大学 瀬戸内圏研究センター 助教
柴田早穂 | 宮の森鋳造工房、しょうどしま民俗座談会
間瀬朋成 | 香川大学 イノベーションデザイン研究所 特命助教
協力 柴田悠基 | 香川大学 創造工学部 准教授
志多結海、川路真桜、根岸祐弥、齊藤昂喜、
森恵海、堀部真由、河村響汰 | 香川大学
山田ゆり | 東京藝術大学

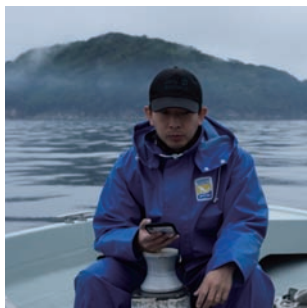
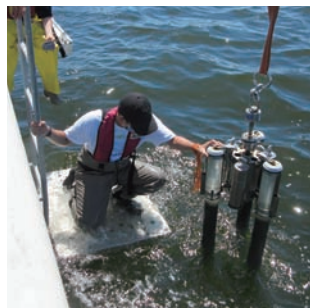
「うみとほんのあいだ」は
科学と芸術の「あいだ」
海と本の「あいだ」に
広がる世界をひらく展覧会です

海洋調査によって得られた
観測データや資料
海をめぐる本
海から採取した素材



播磨灘での海底泥の採取

海底の泥には、その年ごとの植物プランクトンや、河川、大気から運ばれた物質が積み重なっています。泥を分析すれば、いまの瀬戸内海の姿がわかり、深く掘れば昔の泥に出会うことができます。深い層から浅い層へとたどることで、過去から現在への環境の変化が見えてくるのです。泥は、さまざまな時代を記憶しています。



科学者
中國正寿 | Masatoshi Nakakuni
香川大学 瀬戸内圏研究センター 助教

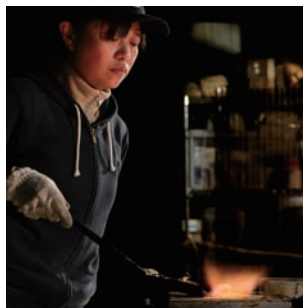


photo 坪佐利治

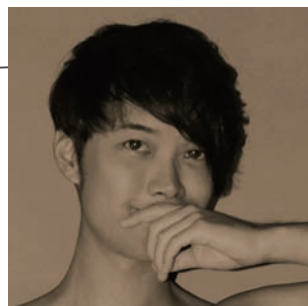
鑄金作家

柴田早穂 | Saho Shibata

宮の森鑄造工房、しょうどしま民俗座談会

瀬戸内の過去 —— 現在 —— 未来をつなぐアーカイブ Vol.1 海底泥の分析

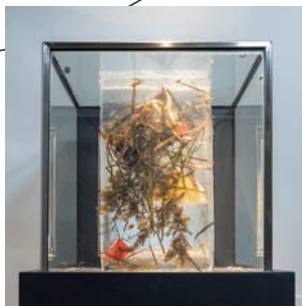
播磨灘の海底泥の分析過程で生じた廃金属の銀と銅。それらを素材に鑄金作家の柴田早穂と沿岸海洋学を専門とする中國正寿が小さな金属彫刻を制作しました。廃金属は研究の痕跡でもあります。その痕跡を起点に、科学と芸術のあいだで対話を重ね、その過程は写真家 / 映像作家の坪佐利治によって記録されています。完成した彫刻は、海洋研究者の胸元でアクセサリーとして身につけられ、潮風を浴びながら、これからの航海と研究の物語をともに紡いでいきます。



美術家

間瀬朋成 | Tomonari Mase

香川大学 イノベーションデザイン研究所 特命助教



The Sea's Assemblage | 海のアッサンブラージュ

瀬戸内海の「潮目」には、流木や海藻、それらに随伴する稚魚、さらにプラスチックなど、人間生活の痕跡である海ごみが一時的に集積します。本作は、それらを海洋調査船で採取し、凍らせたオブジェです。絶えず変化する潮目に現れ、ほどなく形を変えていく「いま・ここ」の生命の集まりを、人間が認識できる時間へと変換し、海がつくる一瞬の生態系を再構成する試みです。この作品の作者は、私ではなく、海なのです。

海を観る。
波の動き、潮の流れ、水の色を記録し、数値にする。
積み重ねられた知見は、やがて論文となり、本となって図書館の棚に並ぶ。
けれど、海はデータだけでは語りきれない。
海で過ごした記憶、潮風の匂い、水面に揺れる光、浜辺で拾った石の手触り。
私たちが海辺で感じたものの多くは、数値の外側へとこぼれ落ちていく。
それでも、科学はその複雑さを理解しようと問い続ける。
研究者は海へ赴き、観察し、仮説を立て、検証を重ねる。
ときには考えを修正しながら、海への理解を少しずつ深めていく。
観察は記録となり、記録は知識となり、知識は本となる。
そして本のある場所、図書館で、私たちはもう一度海と出会う。